

実践報告

地域と連携した保育実践報告
～造形あそび，工作体験を中心に～

江村 和彦
日本福祉大学 子ども発達学部

Childcare practice report in cooperation with the community
～ Focusing on experience of playing with modeling and working ~

Kazuhiko EMURA

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords : 地域連携, 造形あそび, 保育体験, 実践的教育

要旨

本研究では，保育者養成校における教育の一環として地域と連携した保育実践に着目した。保育者に必要な様々な人々と関わる経験をカリキュラムや実習以外に補う実践報告である。保育者をめざす学生自身が保育・子育て支援施設において造形や遊びの実践を通じて学びを深める過程に注目し，保育実践の積み重ねによって学ぶ意識がどのように変化していくのかを検証する端緒にしたい。本稿は造形あそび，工作体験を中心に行った実践について報告する。

1. 研究の背景と目的

2015年に始まった子ども・子育て支援新制度では，利用者支援，地域子育て支援拠点，放課後児童クラブなどの充実を図るといった地域の実情に応じた子ども・子育て支援を打ち出している。その子どもの保育や保護者支援の中心にいるのは，保育士，幼稚園教諭，保育教諭などの保育者である。保育者は，保護者や地域と連携して子どもの保育，幼児教育に関わるなど，その役割はますます大きくなってきている。保育者の多くは，保育者養成の教育機関で単位を取得し，定められた実習を終えて資格を取得する。実習では，乳幼児と関わりながら保育者の役割，支援の方法などを学ぶが，子育て支援の視点となる保護者との関わり，また地域の人々のかかわる

機会はほとんどない。保育者をめざす学生には，教育機関に在籍している間に，保護者や地域の人々と関わることを視野に入れて学ぶことが求められているにも関わらず，その学習機会は各学生がボランティアやアルバイトという形で体験する程度で限られている現状がある。様々な大学によっては，保育園や子育て支援の場を設け，地域の子育て支援をしながら在学生の学びの場になっているが，十分とはいえない。

筆者は，保育者養成の幼児造形領域の教員という立場から，地域の保育園や子育て支援センターでの造形を中心とした活動を通して，子どもやその保護者，地域の人々と交流している。学生たちが，造形活動を通して子どもたち，他の人々と遊びや制作を共有することで，子ども

理解、保護者理解、地域理解の一助になると考えたからである。保育者をめざす学生は、大学のカリキュラムの中においては実習のほかに直接子どもや保護者と関わる機会は少ない。保育現場を知る機会は、学生が自発的に保育所などでボランティアやアルバイトをする程度である。そこで、学生が学外活動として保育園、子育て支援センターでの様々な活動に参加し、学生の実践知を増やすことを模索した。直接触れて感性を豊かにするという観点からも有効である。

本研究では、学生自身が保育・子育て支援施設において造形や遊びの実践を通じて学びを深める過程に注目し、保育実践の積み重ねによって学ぶ意識がどのように変化していくのかについて研究を深めていきたい。本稿では保育園、子育て支援施設などで子どもたちや保護者、地域の人々とのかかわりの実践を報告する。

2. 実践内容

研究対象となる保育実践は、通常保育とは異なり保育者と子どもたちだけではなく、実践者（地域の人々）が活動内容の中心となった遊びとする。遊びの対象は、乳幼児とその保護者である。実践内容は、保育園、子育て支援センターと協力して企画したものや既に行事の一部になっているものである。遊びの場所は、保育園の遊戯室、子育て支援センターの研修室や屋外など様々である。

実践研究のための報告として次の4例を報告する。(1) 釘うちトントン船づくり、(2) 父子で土粘土あそび、(3) 粉から感じる粘土遊び、(4) ザリガニ釣り、である。4例は、2017年、2018年に行った地域と連携した幼児や保護者とともにあそび活動として保育園、子育て支援センターで活動したものである。活動内容は、素材遊び、工作体験、自然体験など多岐に渡っている。なお個人情報保護の観点から自治体、施設の名称は仮称とする。配慮事項としては、実践活動の撮影に関しては研究のみに使用するというので、保育園、子育て支援センターの了承を得た。

3. 実践報告

(1) 釘うちトントン船づくり

- 1) 日時：2017年8月1日午前10時から12時まで
- 2) 場所：A町立Z保育園
- 3) 対象：年長児28名
- 4) 参加学生：本学子ども発達学部保育専修3年生10名

5) 内容：A町内で木工制作サークル活動をしているグループの有志の方々が講師を務める工作教室の補助スタッフとして学生が参加した。年長の幼児たちが木の板をのこぎりで切り、金づちと釘で固定しながら舟をつくるもので、学生はその活動援助として参加した。

6) 活動のねらい

地域の人々と子どもたちのかかわりを観察する。のこぎりや金づちの使い方を修得し、子どもたちと一緒についたりして使い方を教えたりする。子どもたちと一緒に船をプールに浮かべて遊び、その様子を観察する。

7) 活動内容

保育園の遊戯室にブルーシートを敷いて活動空間として設定された。木工サークルの方が幼児の人数分の木材、道具を準備されていた。学生たちは木工サークルの方の事前説明を受け幼児2人に対してひとりの学生が補助として参加した。幼児たちとあいさつをして、サークル代表の方が、のこぎりの使い方、金づちの使い方、注意点などを説明した後活動が始まった。

あいさつ・説明

木工サークルの方々が、子どもたちの前で今日の活動の内容を伝え、材料の木についての解説を行い、のこぎりや金づちの使い方を説明した後、学生らは子どもたちとグループになって分かれた。(写真1)



写真1

のこぎりで切る、釘を打って船をつくる

椅子の台に木をのせて、のこぎりで切る。学生は、のこぎりを持つ子どもの後ろから手を支えながら一緒に切った。切った部品をどのように組み合わせるか一緒に考えながら、金づちで打ち付けていった。学生は釘を押さえあげたり、一緒に打つ姿があった。(写真2)



写真2

舟にサインペンで着色する

できあがった舟に着色するために、油性のサインペンで思い思いに色を塗っていった。その姿を話をしながら見守る姿があった。(写真3)



写真3

進水式

部屋の外に水を張ったビニールプールがあり、完成した船を浮かべて遊んだ。波を起こして水遊びのような状態になりながら、自分のつくった舟を動かして楽しんでいた。学生たちも波をおこしたり、途中壊れてしまった舟を直してあげたりする姿があった。(写真4)



写真4

(2) 父子で土粘土あそび

- 1) 日時：2017年8月10日午前10時から12時まで
- 2) 場所：B子育て支援センター
- 3) 対象：B町内在住の親子（父と子）20名
- 4) 学生：本学子ども発達学部保育専修3年生7名，2年生1名
- 5) 内容：未就園の子どもとその父親を対象に，家庭では持ちえない大量の土粘土を使って全身を使って遊ぶ。

6) 学生の活動参加のねらい

未就園児の発達の理解

父子の関係性の理解

土粘土遊びを体験し，自らの遊び方の幅を広げる

7) 活動内容

会場準備

子育て支援センター2階の会議室に，ブルーシートを敷いた。土粘土120kgをひとつ1kgくらいの大きさに切り分けておく。掃除用のぞうきんやバケツ，ヘラを会場の隅に準備しておく。

土を落とす，踏む，たたく

会場に父親と子一組に学生が一人つく形で会場全体に広がり，ひとりひと塊の粘土を持って，両手で床に落として遊ぶことから始めた。幼児は力が弱く粘土を落としても転がるばかりで変化がなかった。そこで，父親が落とすと大きな音とともにクシャッとつぶれた。この音に子どもたちも喜んで床にどんと投げたり踏んだりして遊びが始まった。(写真5)



写真5

思い思いの遊びを展開する

床に落ちた粘土を踏んだり，転がしたりする中でそれぞれの遊びが始まった。ままごとをするようにお団子やハンバーグなどをつくる子，ひたすら転がす子など。父

親が遊びの中で手詰まりをみせた場面などで、学生が粘土の丸め方、のばし方を見せたりしていた。(写真6, 7)



写真6



写真7

高く積み上げゲーム

終了の時刻が迫ったところで、親子対抗の粘土積み上げ競争を行った。子どもたちは周囲に飛び散った粘土を集め、父親と学生とともにどんどん高く積み上げていった。片付けも同時に行うことができた。(写真8)



写真8

後片付け

遊び終わりのあいさつをして保護者、子どもたちが退場した後、土粘土を集めたり、ブルーシートの掃除、会場全体の掃除を行い活動を終了した。

(3) 粉から感じる粘土遊び

1) 日時：2017年8月30日午前10時から12時30分まで

2) 場所：C町立Y保育園

3) 対象：3, 4, 5歳児

4) 参加学生：保育専修2年生8名, 3年生7名

5) 内容：屋外の活動スペースで土粘土粉末の感触を、体全体で味わう。また土粘土の粉末に水を入れて感触などの変化をみつけたりしながら全身で楽しむ。

6) ねらい

学生自身が土粘土の感触を全身で味わう。

幼児の遊びの中での発話、遊び方、仲間との関わり方。

保育者の幼児との関わり方を観察する。

遊びのための準備と後片付けの方法の理解。

7) 活動内容

遊びの空間づくり

園庭にブルーシートを敷き、遊びの空間をつくる。粘土の粉をグループごとに遊べるように洗面器に盛る。活動後の服や子どもたちの体を洗うスペースの確保、タライなどの容器の準備をする。掃除道具の確認をする。活動途中に混ぜる水をペットボトルに入れる等して用意する。

あいさつ、遊び開始

3, 4, 5歳児の幼児たちが遊びの空間に入り、あいさつをしてから、空間に4人ひと組でグループをつくって輪になって座る。各グループを担当する学生が粘土の粉を子どもたちの前に広げる。

土の粉の感触を楽しむ

合図とともに、粉の感触を、指先、手の平、全身と順番に体験していく。十分に粉の感触を味わった後でペットボトルに入れた水を配布し、粉に少しずつ水を混ぜて遊ぶ。(写真9)



写真 9

土粘土の変化を楽しむ

粉と水が混ざりそれぞれの感触を楽しむ。グループによって、粉のまま、粘土状、泥と様々な土の状態遊ぶ。(写真 10)



写真 10

遊びの展開

ブルーシート全体に粘土の泥の空間ができあがり、滑ったりお互いの体に付けたりして全身で遊ぶ空間ができあがった。学生も子どもも保育士たちも全身を使ってダイナミックに遊ぶ姿が見られた。(写真 11)



写真 11

活動後

年齢の低い子どもたちから随時遊びに区切りをつけて、体を洗う、服を洗うなどして部屋に戻っていった。学生たちは子どもたちの服を洗ったり、ブルーシートの掃除、粘土を集めるなど活動の後片付けの作業を行って終了した。(写真 12)



写真 12

(4) ザリガニ釣り

- 1) 日時：2018年6月19日午前10時から11時30分まで
- 2) 場所：D町立X保育園
- 3) 活動内容：ザリガニ釣り
- 4) 対象：年長児24名
- 5) 参加学生：保育専修9名学校専修2名
- 6) 内容：保育園外の人工池で子どもたちとザリガニを釣って交流する。ザリガニを簡単な道具を使って釣る体験をする。
- 7) ねらい
ザリガニを釣る方法を知り、子どもたちの支援をする。
地域の人と交流する、地域の人々と保育園の関係性を体験する。
園外での保育活動を体験し、保育者の支援を見る。
- 8) 活動内容
あいさつ
地域のボランティアV氏が、ご厚意で所有地の一角をザリガニ池として整備しており毎年6月に保育園の年長児の交流行事となっている。V氏の説明を聞いてから釣りを始めた。(写真 13)



写真 13

釣り道具の確認, 釣り開始

50 cm ほどの木の棒や竹に凧糸を付けて、先にザリガニの餌となるスルメを洗濯ばさみではさみ、釣りが始まった。学生は子どもたちの竿の先にスルメを付けてあげたり、ザリガニのいそうな場所を一緒に探したりした。(写真 14)



写真 14

子どもたちとの交流

およそ 4m 四方の池に散らばって釣りを楽しんだ。学生は子どもたちが釣ったザリガニをバケツに入れる援助をしたり、学生自身もザリガニ釣りを楽しんだ。(写真 15, 16)



写真 15



写真 16

どのザリガニを連れて帰るか

釣りあげたザリガニは、すべて保育園に持ち帰ることはできないため、クラス担任の先生が声を掛け子どもたちで話し合いどのザリガニを持ち帰るかを決めた。

お見送り

子どもたちは保育園にマイクロバスで帰るため、ザリガニ池から駐車場まで学生も引率の手伝いをして見送りをして活動を終了した。

4. 成果と課題

4つの実践から学生が獲得した成果として以下の5つを挙げる。

(1) 親子の姿

粘土遊びの場面では、子どもと密接に関わることができなかった代わりに、父子の関わりを間近に見ることができた。学生は、はじめは声をかけることにためらいを感じながら、父子と一緒に遊ぶことの楽しさを援助しながら共有していた。実習では、子どもの姿を観察するが、親子関係を見ることはできない。その関係性を見ることができたことは収穫であった。

(2) 地域の人々の姿

木工サークルの人々と船をつくったり、ザリガニ池で釣りを教えてくれた人々との交流は、学生にとっても貴重な経験となった。保育園や子育て支援センターには、保護者だけでなく様々な人々が関わっている。保育者となった際には、日常的に初対面の人々と話をするようになるだろう。保育は保育者だけではなく、様々な人々とのかわり成り立っていることを、体験を持って知ることができた。しかし、そこには日ごろから地域の人々との対話、連携をするために園長をはじめとした保育者

の積み重ねがあるということ、交流の中から感じ取っている様子が見られた。

(3) 保育者の姿

保育者の子どもたちを援助する姿は、今回の例のように通常保育と異なるものだった。例えば、ザリガニ池までバスに乗って往復することや地域の大人と子どもたちが関わるときの様子等、子どもたちの緊張や興奮する姿も見られるため、より一層の配慮する姿が見ることができた。粉から感じる粘土遊びにおいては、屋外で造形遊びをする際の準備と後片付けの重要さを体験し、そのうえで子どもたちが伸び伸びとあそぶことができるように配慮されていることを感じていた。保育そのものの背景には、保育者の十分な準備と配慮があることを実感することができた。

(4) 大人の遊ぶ姿

子育て支援センターでの大量の粘土で遊びでは、大人でも味わうことができない経験だったため、父親自身が楽しんでいる姿を見ることができた。また保育園での粉の遊びは保育者全員が、泥まみれになって嬉々として子どもたちとあそぶ姿が見られた。保育者や大人が真剣に遊ぶ姿を見せることで、子どもたちも安心して遊びに没入することができる好例を見ることができた。

(5) 自分自身の姿

学生自身は、子どもと同じ目線で遊ぶことが大切だと実感しているようだった。それは、ザリガニを釣ることができて本当に喜んだり、粘土の粉の感触に感動したりする姿からも明らかであった。保育にとって、子どもの目線に立つことは重要な姿勢である。実習とは異なり、自分自身の実習評価を気にすることなく子どもと同じ目線で遊ぶことができ、まずは自分自身が遊びを楽しむことが大切だということを経験できた。

実践例4つから明らかになったことは、いずれの活動も、学生たちにとって大学の講義、演習では得られない学びとなった。地域の人々や保護者と幼児たちとの関わりの様子を体験から感じ取ることができた意味は大きい。今後の課題として、これらの実践の積み重ねの中で、学生たちがどのように保育の場面を見ているのか、子どもの姿、保育者の援助の在り方、地域の方々の関わり方のそれぞれの場面を見ていきたい。特に造形表現、遊びの

活動の場面での経験をリアクションペーパー等から抽出していき、保育者養成に必要な造形実践指導の在り方の研究を深めていきたい。